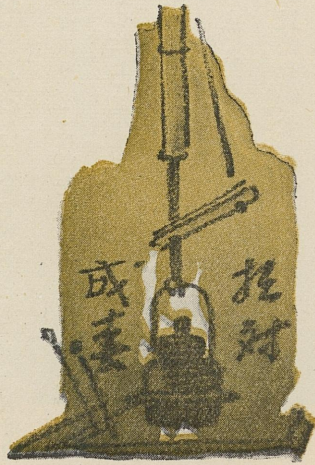


入悉字獨嘯



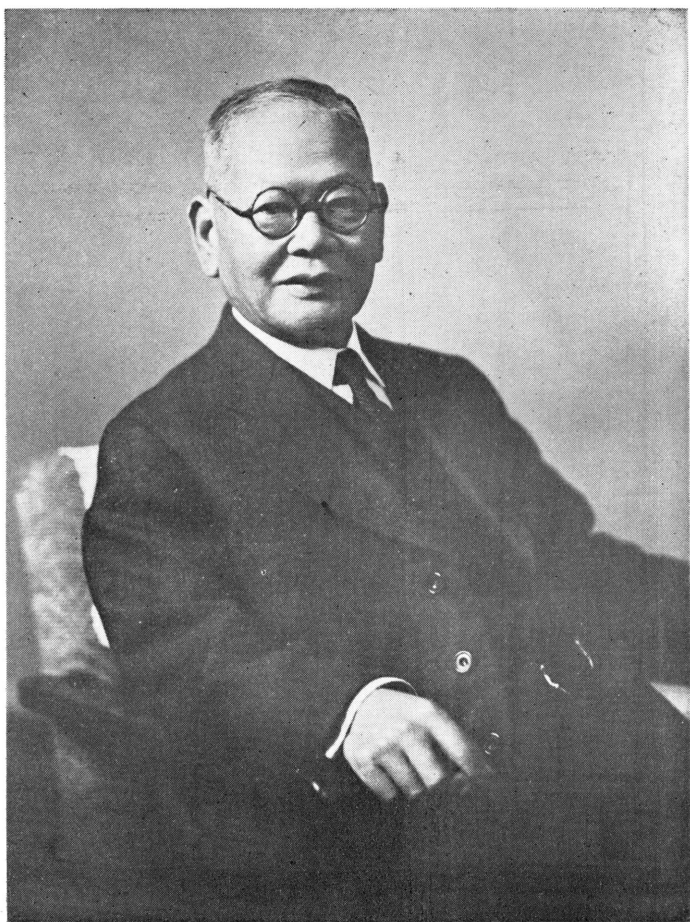
入黑字獨嘯



## 爐壁の揮毫

昭和五年に私は六ツ川町の山中に地をトして現在の住ひを新築した。私はこの機會に三溪先生の高風を偲び且記念するものが欲しかつた。恰かもよし、書齋兼應接間に古風の爐を切つたので、その爐壁に銅板を張り、これに先生の揮毫を願ひたいと考へた。早速お願すると心よく引うけて下さつた上に先生は自ら私の茅屋をお尋ね下さつて爐壁の位地や寸法に就いて詳細な下調べをせられた。

私は先生の事を苟もせられざる態度と熱意に對し深い畏敬を感じたのであつた。その書は「相對成春」と言ふ四文字で先生の風格を偲ぶ雅致豊かな書である。私はこれを玉川堂に囑して槌起し爐を飾つたのである。些か分に過ぎるの感を抱いてゐるが、今先生の長逝に會つて、得難き記念とはなり、且日々相向つて先生を追慕するよすがとなつたことは、私にとつては望外の賜である。



(1)

影 近 生 先 木 鈴

忠の古作

天皇

煙海樓書

昭和十七年、新春



上 東 郷 神 社  
中 入 愚 亭 扁 額  
下 入 愚 亭





不減の金字塔名教自然碑

缶竹堂

教育師道ヨリ始ル。今在學  
先生現代學。見師道實踐也。  
其門弟、先生ヲ凌慕尊視ハ、  
保然、先生ノ位ニ多ク地獨造ル。語

男兒思所言言、所行カ隨

上松峰用筆

雷同也。予、莫逆ノ友誼彌久シテ益々

厚ク加之シテ、蓋シ互ニ相許ル所カ力為

耶。吾耶。如書ヲ讀シ、君子中ニテ之ヲ許ス

昭和十七年二月十八日於熱海楽園社

厚知 松峰ハノ道史





## 記念碑々々文

丈夫自有衝天氣 不向如來行處行 煙洲鈴木君達治ノ如キハ ソノ人歟 君初メ  
京都ノ同志社ニ學ビ更ニ東京帝國大學ニ入り 理科ヲ修ム 大正九年一月十九日政  
府勅令ヲ以テ横濱高等工業學校ヲ設置スルヤ 君即日選バレテ其ノ校長ニ任ゼラル  
創立經營ノ業 専ラ君ノ努力ニ俟ツモノ多シ 然ルニ大正十二年九月一日大震火  
災ノ起ルヤ 横濱最モ其厄ニ罹リ 全校ヲ舉ゲテ殆ンド焦土ニ歸セシメタリ  
此時ニ當リ 青天霹靂 命令一下 愛知縣名古屋市ニ移轉セシム 君慨然トシテ  
起テ勇奮自カラ禁ゼズ或ハ市ノ有力者ニ懇ヘ 或ハ當局者ニ抗議シ 奔走周旋寧處  
スルニ違アラズ 遂ニ現場ニ於テ漸ク該校復興ノ目的ヲ達スルコトヲ得タリ  
君ハ夙ニ 皇室中心主義ヲ奉ジ 躬行實踐一ニ自發ノ力ニ頼ルヲ旨トシ 特ニ學  
生ヲシテ各自ノ人格ノ尊重スベキヲ自覺セシメ 學生ヲシテ天賦ノ才能ニ應ジテ  
其ノ所長ヲ發揮セシムルコトヲ教育ノ主眼トシ 而シテ自ラ三無主義ヲ標榜ス 曰  
ク無試驗 曰ク無採點 曰ク無賞罰 君ヲ知ラザル者 皆ナ其言ヲ異トセザルハナ

シ

然モ其ノ効果ハ頗ル著明ナルモノアリ コレ職トシテ君ノ誠意ノ學生ニ感孚スルトコロタラズンバ非ズ 而シテ横濱高等工業學校ガ特殊ノ學風ヲ陶冶シ 我ガ教育界ニ於テ一種ノ異彩ヲ發シ 超然獨歩ノ觀ヲ呈スルモノ寔ニ偶然ニアラザルナリ

此ニ於テ君ハ創立滿十五年ヲ期シ 自ラ選抜シタル後任者ヲ推薦シ 悠然トシテ去レリ 君ノ如キハ進退出處實ニ其道ヲ得タルモノト謂フベシ

比ロ故舊門人碑ヲ校庭ニ建テ 君ノ德ヲ頌セント欲シ 文ヲ予ニ徵ス 予君ト相得ル淺キニ非ラズ 欣然ソノ知ル所ヲ錄シテ以テ後ノ君子ニ諭グ 然モコレ未ダ君ノ全面ヲ罄スニ足ラザルナリ

昭和十二年十一月一日

蘇峰 德富猪一郎 撰  
原 三 溪 書

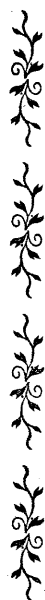
(註) 不向如來行處行、如來行ク處ニ向ツテ行カズ

深 惜 之 書

鈴木達治先生在橫濱高等工業學校長之職兼神奈川縣立商工實習學校橫濱市立工業專修學校々長前後十有五年其所薰育諸生不下五千人皆尤爲世用先生達眼明識不拘俗論常斷行其處信往々出於意表然事皆無不奏功蓋先生內密外寬持身清待人信愛故門下諸生樂而修道皆化其德先生唱自由教育之說徹底施之然諸生敢不流放縱者寔有故也先生今年六十五有爲後進開道之意則擢富山講師推而代己卒然掛冠先生辭校時門下子弟相集數千牽袖惜別無能仰見自是先生把鋤灌園優遊自適頗有古人之風余常服先生之爲人深惜致仕則呈渡邊華山先生筆老子出關圖一幀聊以爲記念蓋此畫與先生有一脈相通者也

昭和十年春三月

鈴木達治先生 硯右



私が愛する學校を去つて間もない或日のことであつた。三溪先生は不便な私宅を尋ねられて、記念として私に秘藏の渡邊華山筆老子出關の一幅を贈られ、且先生の筆になる由來記の副軸を添へて贈られた。華山の幅の藝術的價值に就ては説くまでもないことであり、私の家には全く過分のものであることは言ふまでもないことである。が然し私はこの華山の幅にもまして、先生の副軸に心をひかれるのである。私は先生のこの書をひもとく毎に先生の生氣に接し脉々として迫るのを覺える。これこそ私にとつては二物なき家の寶である。

## 序

煙洲鈴木達治先生横濱高等工業學校創立に當り初代校長として就任せらるゝや自由啓發教育主義を樹立せられ各人天賦天稟の才能徳性を自由に發達せしむるを以て教育の眞髓となし名教は自然なりと喝破せられ滿十五ヶ年間御在職中之を唱導し且躬行せられたり

爰に本校獨特の校風は蔚然として作興し其の下に育まれし幾千の若人は夫々産業界に學界に或は教育界に現下總力戰の一端を荷うて顯著なる功績を舉げ大なる貢獻をなしつゝあるは汎く認めらるゝ處なり

先生御在職中卒業式々辭として或は他の機會に於て屢々自由教育の主張抱負を披瀝せられ或は青年學徒の修學上の心構へ又は卒業後處世上の指針等について説述せられ是等を蒐録して昭和四年に「自由教育の俤」同八年に「自由教育の片鱗」の二卷となり其の後校庭に建立されし「名教自然」の碑と共に永く先生の高風を傳ふる好箇の記念物となりたり

先生は昭和八年以降本校の新聞横濱高工時報に「六ツ川夜話」と題し又本校卒業生の團體たる横濱工業會の會誌上「山の上から」と題されて毎號椽大の健筆を揮はれ昭和十年學校長御辭任後も續いて絶たれずして今日に至り回を重ねること實に前者百五十を越え後者四十餘に及ぶ時事を談じ教育を論じ時に歴史を語り滾々として盡きざること泉の如し

而して其の中心を貫くものは一君萬民の日本精神の鼓吹なり内に遠大なる經綸を藏し筆致雄勁にして然も流麗讀者をして卷を措くを忘れしむ

今回本校報國團情報班は横濱工業會の協力を得て是等を集纂し「入愚亭獨嘯」と題して汎く配布することゝなれり一は之を以て本校校風昂揚の資を加へたるを憚ぶと共に他は是に依り先生警世の金字を校外に獎め得るを光榮とするものなり

横濱高等工業學校

富 山 保

## 自序

先般我高工情報班員が來訪し、六ッ川夜話は近く百五十回に達しますから、此機を以て夜話を一冊にまとめて、學校關係者間に頒布したしとて、私に賛意を求められた。

夜話も其まゝにして置けば反古となつて消え去るものを、一冊の書籍として残すことの出来るのは、有り難きことには相違がないが、碌でもないことを記述したことを思ひ起すと、心中實に忸怩たるものがある。がとに角好意を謝して快諾した。

六ッ川夜話は高工時報の發行の度毎に、部員兩三名が夜中私の宅に来て、私の口授することを筆記し、更に私が加筆して紙上に掲載したるものである。冬の寒き夜は炬燵の中で、病中は床の中から物語つたもので、一回も缺稿したことがなかつた位が、唯一のとりえであつたかも知れない。六ッ川の山莊の靜かな夜、一本の葉巻を口にして、美しい渦巻をなして立ち昇る紫煙の消え行く方と、他念もなく萬年筆を急がしく走らす紅顔とを見較べつゝ、下らぬことを取留めもなく、物語るのが私の樂みの一つであつた。

陋屋の背後をなす丘上に東郷神社を建立したのが、元帥がなくなられてから丁度一ヶ月目の昭

和九年六月三十日であつた。同時に社畔にさゝやかな四阿を作つた。夏の暑い日中には書物を枕頭に此處で午睡する。冬の長閑な日には境内から拾ひ集めて來た落葉や枯枝を燃やして暖を取る。功罪は別として、とに角私は一生を教育界に始終した。此上又何を望み又何を企てんやである。賢や得て望むべからず、寧ろ愚を學ばんものと、この四阿に入愚亭と題し、私の一つの安息所とした。

六川岡上望悠悠　　畢竟功名無意求

春色滿山人不見　　東郷社畔一輕裘

は當時の一感想であつた。

或る初冬の日私の師として仰ぐ、蘇峰徳富先生は此の四阿に小憩せられ、

人間自有回天力

林下空懷憂世心

と又別に入愚亭の眺望を愛でられ

木落又添山一峰

の大書を揮毫せられた。



私には神社と四阿を繞る敷へる程の樹木や、其木蔭に育つ春夏秋の野花に無限の愛着がある。隣接する猫額の畠地には晴耕雨讀の餘生が約束せられて居るやうに感ぜられる。蘇峰先生の履蹤と揮毫とは私のこの境遇に思ひ儲けぬ餘情が恵まれたことを感謝する。同時にこの境遇を與へてくれた幾百幾千の學校關係の同情者に感謝せず居られない。

退職後まだ優游自適の慣に染まぬ間に、世間が次第に騒々しくなつた。其れが遂に非常時局にまで進展した。高齢の我蘇峰先生は椽大の靈筆を揮つて、頻りに警鐘を亂打せられた。屢々筆を投じ肝血を搾つて壇上より大聲疾呼せられた。私とて平素先生の驥尾に附せんとするもの、何を以てか獨り入愚亭に醉生夢死が許されよう。

而して私の寤寐にだも忘れ得ぬものは、弘陵三校關係の壯青年である。彼等壯青年は實際我帝國の寧馨兒である。

今日又他日國家有用の材として、滅死奉公の誠を致し、曠古の大業を背負ふて立つことは、秋毫も疑を容れぬ所であるが、又同時に彼等の中には、非凡の手腕才能を發揮し、我帝國の常時非常時に偉大の貢獻をなし、光彩を中外に添へ以て 聖恩に酬い奉るものゝあることを冀望するのである。

これを古今の例に見るも、非凡の才能は必ず若き青年期に濺刺として湧き起るべきである。然らずんば少くとも其萌芽の發生を見るべきであつて、決してこれを老大に期待すべきものではない。教育の重要性の一つは此所に存するので、我々教育者の最も心すべき點である。須らく心を虚くして天地の自然に居り、作爲を用ゐず、徐に人間靈智の萌芽を守護し、これを育成しなければならぬ。

さらば教育の第一義は自覺である。此自覺と相呼應して、時代適應の訓練を以てすべきで、訓練は第二義的のものである。徒に訓練を盲信し、訓練に盲従し、靈智を滅却するが如きは、民族を退歩に誘導するものにして、又人類の不幸である。

此信念を以て邁進したものは名教自然であつた。しかも鈍材爲す所なく、力竭きて職を去つた。爾來あり難くも恩給に衣食すること既に七ヶ年、世間に徒食を誹謗するものあらんも、顧慮に遑なく、耽々一片の志、林下空しく憂世の心に起居し、徒に入愚亭に獨嘯した。

端なくも奮臘八日、米英を敵として大東亞戦争が勃發した。而して國民の常識をさへ超越し、世界を驚殺せしめたる大戦果が擧げらるゝや、全國民の底力は澎湃として湧き立つた。國民的自覺と自信は一大火燄の如く燃え上り、一日にして能く一世紀を過去にして飛躍奔騰した。而し

て帝國の舞臺は光芒萬丈百八十度の大回轉をした。現状に未練を持つ人々、事大に執着する人々は、否應なしに舞臺と共に其背後に葬り去られた。又去るべきである。かくして役者は入り代り、颯爽として新人が躍り出でた。又出づべきである。新しき舞臺は最早亞細亞を背景とするものではない。急轉直下全世界を背景とするものである。信賴する我三校の壯青年よ立て、帝國臣民たるの光榮に無限の感謝を捧げよ。我等の總ての力は 皇室中心より來る。此力を以て亞細亞に於ける英米を容赦なく破壊せよ、破壊の跡に前代未聞の偉觀を建設せよ、千載の偉業は老大に期すべきでない。立て壯青年よ、私の期待に孤負すること勿れ、立つて世界の名優となれ。老骨私は舞臺の背後から其反響だけでも聽いて居よう。

本冊子の爲め蘇峰先生は特に序文を賜つた。私にとり過分の恩倖で感激措く能はざる所である。富山校長又懇篤なる序文を寄せられたことを謹んで感謝す。又本冊子出版に關し特に多大の勞を取られたる情報班員村松四郎君並に班員諸君に深甚なる感謝の意を表す。

昭和十七年二月十三日

退職滿七ヶ年の記念日

煙 洲 迂 人

裝  
幀  
中  
村  
順  
平  
氏

目次  
六ツ川夜話

掘られた道	一頁
思はぬ快報	二
恩師の因縁	四
向學心の是非	五
荒木貞夫大將	七
メートル法	八
教育改革難し	一〇
文教と文政	三
一茶と元帥	三
二高回顧斷片	五
天佑と神意	八
益田孝男を訪ふ	九
財界三巨頭	三
櫻井博士と井上子	三
村塾時代を偲ぶ	四

井上日召氏管見	六
池田菊苗先生	六
賄賂教育	元
全能主義の没落	三
道場教育	三
胸を打つ情景	三
教育萬能の錯覺	三
生地と染色	六
八萬の法書	元
國體明徴の一線	元
大楠公	四
横濱人と文化	四
智識資本主義	四
若尾と安田	四
忠と孝	四
阿蘇山麓偶感	四
彼等を殺せ	五
保守と變轉	五

永田中將を偲ぶ	五
工業日本精神	五
赤字財政不脅威	五
惠まれた學窓	六
大谷光瑞師	六
噫松田文相	六
神と佛	六
總選舉偶語	六
二・二六事件	六
劇と音樂	六
東郷神社祭典	六
國際的協調精神	七
墓場と監獄	七
精神食糧	七
母乳教育	七
清談錄	七
我子の成人	七
志士の風格	七

哲人哲國	六
日獨の波紋	六
辛棒競べ	六
兩英雄詩碑	六
兩面の摩擦	七
氣魄の辯	七
粗製濫造人	七
長岡半太郎先生	七
時の流れ	七
本格の横濱	七
山莊の喜び	七
教 權	七
列車型の學校	九
合 掌	一〇
學歴時代	一〇
學位の獲得	一〇
建築競技設計圖集に就て	一〇
演習はハイキングには非ず	一〇

名教自然碑……………	二〇
今の學校は使用人型人物の養成所か……………	二三
パアルバツク女史の大地……………	二五
宣　　傳……………	二八
中野友禮氏の講演に因みて……………	三二
新入學生を歓迎す……………	三四
内原滿蒙開拓青少年義勇軍訓練所……………	三六
帝國大學總長と選舉制度……………	三八
名譽の戦死者……………	三三
シユネーダー博士……………	三三
支那の建設……………	三七
我國工業飛躍の片鱗……………	四〇
歳末に際し一大覺醒を期待す……………	四二
土と兵隊……………	四三
櫻井錠二先生……………	四七
大陸會に就て……………	五〇
牧野富太郎博士……………	五三
財政と幣制……………	五五

興亞計畫……………	一五
勤勞奉仕……………	一六
日英東京會談……………	一六
三校一體……………	一七
親英親米は國民の常識か……………	一七
時事小言……………	一七
開校記念祭……………	一七
偉人待望……………	一七
學校教育考……………	一七
農村の工業化……………	一八
我建築科の特色……………	一八
日米無條約時代……………	一八
紀元二千六百年を表彰する唯一の 記念事業……………	一九
現代教育の精神的貧乏……………	一九
文臣不愛錢武臣不惜命……………	一九
校庭の樹木……………	二〇
大戰感有り……………	二〇
優　越　感……………	二〇

忠君に精進せよ……………	三二
道徳政治と法治政治……………	三四
スバイ問題……………	三六
諸君の歸校を迎へて……………	三八
新體制に就いて……………	三〇
噫、渡邊勝三郎氏……………	三三
日獨伊三國條約……………	三七
再び新體制に就いて……………	三〇
西園寺公を悼む……………	三三
日米關係に就いて……………	三三
大角大將の思出……………	三六
賀陽宮殿下の御台臨……………	三九
責任感……………	四三
日ソ中立條約……………	四二
馬と戦争……………	四八
風雲兒松岡洋右……………	五二
漢人と異民族……………	五四
ブレーン・トラスト……………	五五

菊池寛氏の提案に答ふ……………	二〇
横濱帝國大學……………	二二
横濱市の交通網の重點を地下に置 くべし……………	二六
軍教と報國隊……………	二八
三國同盟記念日所感……………	二七
千載一遇の瞬間……………	二五
アメリカよ手を引け……………	二九
青年よ目醒めよ……………	二〇
日米交渉……………	二四
待つて居た、來る者が來た……………	二八
香港陥落……………	二九
眞珠灣の「討入り」……………	二九
百八十度の回轉……………	二九
山の上から……………	
幸運……………	二〇
我意……………	二四
共榮……………	二七
心構へ……………	二〇



早春偶語……………	三二
春宵偶語……………	三七
皇道精神……………	三一
工學下村孝太郎先生を偲ぶ……	三四
博士……………	三五
五十年前を回顧して……………	三九
南國を旅して旅行靴の中より……	三四
有吉氏の座談と甜菜糖業其他……	三四
名教自然と雅號由來……………	三四
蘇峰先生……………	七一
日本カーボン二十五年史……………	三五
病床偶感……………	三二
病床私と煙草……………	元一
閑話私と煙草……………	元一
はりがねを読む……………	四一
梅北製作所を語る……………	四八
老婆心……………	四一
事實は小説より奇し……………	四五
武相論壇……………	四一
往くところまで……………	四一

原三溪翁……………	四三
忠君と法治……………	四六
農村問題の緩急……………	四六
ハマの安達さん……………	四四
有馬伯に聽く……………	四四
市と科學研究所……………	四四
東京開港如是我聞……………	四九
太平洋波高し……………	四五
認識を新にせよ……………	四九
別れの言葉……………	四六
出版に際して……………	四七

